新刊紹介

自然観察指導員ハンドブック

239pp　　日本自然保護協会編

最初に「自然観察指導員」の制度について紹介しよう。自然観察指導は自然教育の第一歩として重要なことはいうまでもない。そして自然観察会などの催しは，自然保護運動のなかでも大きい位置を占めている。しかし，実際に野外へ出てその指導に当ると，いろいろな問題にぶつかる。たとえば，出発前のあいさつでは「自然は大地，空気，水，生物は一体となっていて…」など言っておきながら，現地で花の名前を質問されたら「いや，実は私は鳥が専門でして…」。これではいけないと反省しても，いったい指導に当るにはどの程度の知識や経験が必要かというと，また返答に困ってしまう。そこで，一応の基準として「自然観察指導員」の認定制度が日本自然保護協会の手でつくられ，すでに数十名の認定者を出している。今後，各種の観察会ではこの認定指導員がますます活躍することになろう。

さてこのハンドブックは，一口にいうと，その指導員認定のテキストである。読んでみて，日浦　勇さんの「自然観察入門」（中公新書 389，昭50）とくらべると，まったく面白くない。日浦さんの本にもところどころに《リーダーのためのメモ》が書きこまれているが，それがその前の文章の流れにのって，実に生きている。これは，そのメモの部分だけを抜きとって，固苦しく解説しているような本だから，面白くないのは当然である。「面白くないのはテキストというものの宿命である。日浦さんがこのようなテキストを編集したとしても，結果は同じであろう。」そう考えてこの本を読むと，なかなかうまく出来ている。指導員として最低はこの程度必要だろうという点は，ほぼ満たしている。

内容は3部に分かれていて，第1部は自然そのものと自然保護の解説で，生物学的側面に偏りすぎている嫌いはあるが，よくまとまっている。第2部は自然観察の実施にあたっての諸問題で，企画立案から安全対策にいたるまで，指導員として心がけておく事項が解説されている。そして最後に資料として，関係法規や諸団体リスト，文献などがまとめられている。

このテキストを生かすも殺すも，指導員認定にあたって開催される講習会の運営によるであろう。この講習会は関西でも兵庫県自然保護協会などで計画されているから，積極的な運用を期待したい。

（朝日　稔）

自然と人間——社会のなかの生態学

法律文化社　　渋谷寿夫著

その科学の意図内容は，細胞学とか遺伝学とか，名前からだいたい察しがつくものである。ところが生態学だけはおそろしくマチマチで，ある生態学者が冗談のように言っていたが，10人生態学者がおれば10種類の生態学があるのだそうである。

渋谷さんは『生態学の諸問題』以来，多くの著書で，くりかえし『生物の生活を対象とする科学』が生態学である，と主張してきた。今回の著書ももちろんその考えの上に展開されていて，第三部で生態学観がのべられている。この立場にたって，人間が自然をまじめに考え，まじめに自然をとりあつかうために問題を整理した本，を目ざして書かれたものである。

生態学が対象とする生物の環境には人間の手が加わっており，しかも歴史的に人間の影響力は増大しているので，人間は生物の環境の重要な一要因である，という確認から書物は始る。そして人類が生物的自然に働きかける仕方の質的変化を歴史的にふりかえる作業がつづく。『自然』という言葉から読者は地表の景観を想起しがちだが，自然の内容は巾広くとらえられていて，たとえば家畜や作物まで含められている。

人類は自然を変革する強大な営力——自然力であり，それは地球の自然史的発展過程であり，したがって営力の増大必然である。しかしそれは直ちに現在横行している改変を容認してよいということにはならない。自然力としての人間の営力は，人間のあり方——社会的あり方によって規定される。階級社会にあっては人間の活動は階級的な性格をもつ。このとらえ方から，資本主義社会の公害と，ソ連を例にして社会主義社会の環境汚染との比較がこころみられている。

農業を，食料を生産する産業としてだけでなく，自然を管理する役割を高く評価している点は類書にみられぬ特長である。また，巻末の「化学的機械論」は短いが重要な指摘である。

1960年代後半から70年代前半にかけて，方々で発表された論文や講演を集めたもので，決して読みやすい本ではないが，『自然と人間のかかわり』をまじめに考えようとする人におすすめしたい。

（日浦　勇）